

冬と春のはざまに

清水 光子

お正月の賑やかさ、あかるさ気分が尾を引きながら、そして大寒という一年中で一番気温の低いとされている十数日を経て二月、早くも、立春になる。けれど、日本列島大部分の地ではまだこれからが寒くなり、雪が多くなり風も冷たい。でも、さすがに日の光は輝きを増し日足も長くなっているのがわかる。ヴィバルディのヴァイオリン組曲「四季」の「冬」のあの泌みいるようなメロディには、それがよく表現されているように思う。

冬日柔か 冬木柔か 何れぞや

高浜虚子

俗に二、八月は風の強い荒々しい月といわれている。二月の風は凜こがらしである。倉橋惣三先生は「園丁雑感」の「寒風」で「どこまでつめたい風なのであろうか。そのゆく所、触

るる所、もの皆荒み破られぬはない。つれなやただ一ひら残る梢の枯葉をだに吹き払い、振り落さずではやまぬという。」とかかれ、更に「省みればわが心にもこの寒風はあるまいか。」と。なお「その目、その唇、凧の様に人を貫き、裂き、責め、傷つ、くることはあるまいか。」と言われている。「凧に荒された野は、また来ん春の回復もある。一たび心の寒風に荒んだ心は、また回復のよすがもない。」とも。

二月は小の月の中でも日数の少ない月、それに、すぐそこに卒園、進級、進学の春が迫って来ている。親も教師も何となくあせり、いらだちを覚える。それだから短い二月を「逃げる」などという人もあるのだろう。敏感な子ども心はそれを切実に感じ取るのではないだろうか。卒業製作の粘土（焼物）がA君、Mちゃんがまだ出来ていない。「作ろうね」と誘っても乗ってきてくれない。記念アルバムにとじ込む絵がT君、S君はまだだ。三月の雛祭りをかねたお遊戯会にする劇、同学年の○組ではせつせと練習しているというのに……。うちの組はまだ全然やっていない……。などと、屈託していた或る日、ふいにO君が庭で呼ぶ、出てみると、すっきり晴れ渡った空に細い飛行機雲がずーっと線を引いている。先端に小さい点のように光っている。それが遂に視野から外れるまで見入っていたO君が、「ねえ」と話しはじめたのはもう六か月前の夏休みのことであった。

今週中に済ませたいあれこれを考えていた私はショックを受け、O君に頭を下げてお礼を言いたい気持ちであった。

霞まない冬空は清冽な碧さである。そんなある日、園庭に立って何気なく我影をみていて、ふと青空をみ上げたら、そこに白く我影が残像でみえるではないか。ちょうど外靴にはきかえている三人の子達に声をかけ、教えてみた。「うん、みえたよ、おぼけが！」私が手を上げたり、横に拡げたりして影を作るのをまねしていたが、砂場用のシャベルをもって影にしたりして一しきり遊んだ。何故白くみえるの？ ときかなかったのは年中さなんだったせいかしら。と思いつながら、何とばかりかしたことをして楽しんでいたものよ、とおかしくもなった。

凧の吹かない晴れの翌朝、ひどく冷え込んで、屋根にも、常緑闊葉樹の葉にも霜がまっ白におりて、池の水は厚く張って、少々たたいた位では破れないで子ども達の恰好な遊び材料になる。午前中一杯水で遊ぶ。

「育ての心」の「霜柱」にある情景とそっくり「可愛い両手を重ねた中に……」霜柱が、一人のは半溶け、一人の掌は泥によごれている。紙に包んでそと持ってきた霜柱を玄関で迎えていた私に「あげる。」と手渡してくれたUちゃんは今年も短大の二年生である。その霜柱も「心無の霜柱よ」と倉橋先生を嘆かせた有さまだったが、更に霜柱が立つような園庭をもつ園が現今どこにあるだろうかと思ふだに悲しい。

氷は、池がなくても作れるので、氷遊びは意図的に楽しめる。でも理屈っぽくなった

り、決して科学教育などと考えないで欲しい。三歳児組のT君、「ぼくの氷、お家に持って帰る」と、ビニール袋に入れて自分のロッカーに入れておいた。帰り際にみると、ただの水になってしまっていて「ぼくの氷、なくなっちゃった！」と怒っている。「溶けて、お水になったのよ」と言いかけて、溶けるとい言葉が事実として理解できるかどうか、言葉としてだけの納得ではどうなのか、と若い保育者は悩んだ。「ほら、私のも、さっきお皿に入れて白砂のおさとうかけておいたの、これよ。」と砂水をみせる。T君の怒りは保育者のにこりで氷解したようで、ニコツとしたのをそばでみてうれしくなった私。

手で顔を 撫つれば鼻の 冷たさよ

高浜虚子

午後から妙に底冷えがしたと思ったら夜半から雪になったらしく、朝、一面の銀世界で、猶粉雪がしきりに降っている。胸弾ませて登園する。雪国では喜ぶどころではないだるうに、と思いつつも、である。

天地の 息合いて激し 雪降らす

野沢節子

初雪を 誉めぬ息子が 物に成

武玉川

この逆説的なのも面白い。兎に角、東日本の雪の朝は、子ども達はすてきな贈り物を貰ったのである。

ほほをまっ赤にして雪で遊ぶ。さんざん遊んで、入ってきた室の何というぬくもり！隅で、靴下や手袋を干したり代えたりしながら、聞く昔話。大人と子どもの心が一つに溶けあったような時、このような時が若しもないなら、何とかしてつくりたいと思う。

「先生、ぼく、風邪ひいてるからお母さんが外へ出てはだめっていったの。」と、K君はみんなで門から入口までの雪かきをみている。少し不安そうに、しょんぼりと。「そうお、だったらみてね。若し、やりたくなったら来てもいいよ。」と応じつつ、何かを訴えようとしているかにも見える瞳をいとおしく思う。昔から、雪の朝は「裸虫の洗たく」とさえいうではないか……。

あとずさり するのみなりし 幼子の この朝をふと 前にはい出づ 来嶋靖生

冷たい風が一日中吹いたり、雪空が重くたれこめたり、そうかと思うと和やかに日射しが暖かかったりを繰り返しながら、日足が長くなっていく二月、自然は物も言わずに春へ向かって進んでいるのを、自然に一ばん近い幼児（これはおかしな言い方であるけれど）はいち早く感じるようである。球根の芽がおずおずと出かかっているのを見付けたW子ちゃん、驚いて「出てるよ！」と知らせてくれる。

でも大人は、気になることがここへ来て一杯ある。小学校入学が近いのに、年長組の子、この子、大丈夫かしら？ もっと大らかに彼等ひとりひとりの成長エネルギーの昂まりを信じようと思いながらも気になるこの頃である。そんな一人のY君、時々遠くをみているような瞳、元気ではあるが何か今一つ気になっていた。それが二月も半ばになって、猛然と創り始めた。卒業記念の粘土（焼きもの）では、恐竜のような、怪物のような像とも見えるものを時間をかけて作った。「これ何かしら？」とききたいのをぐっと抑えたことだった。そのY君がある日、朝からあき箱のコーナーでさまざまな箱を選んでいた揚句、クッキーが入っていたらしい細長いのと茶色の長細いの二つとをセロテープで着け、上の箱の間に割箸を入れ、それが上下に動くようになってるのを作ったので、それをみていた私は「できたのね」と声をかけた。彼はうなずき、その割箸をしきりに動かしていて、私に「これあげる。」と渡してくれたのだ。「あら、ありがとう。うれしいわ。」と受け取って、今、彼がやっていた様に割箸を動かしてみたものの、はて？ 彼は何をイメージしたのか、とんと私の貧しい想像力ではわからないのである。でも私を理解者と思っているらしいまなざしをみると、どうして今更、「これ何なの。」と言えるだろうか。悩んだ。そして思い切って、「ここにお窓あげたら、外がよく見えるかしらね。」と言ってみた。すると、何と、彼は「あっ、そうだ。」と私の手から取り戻して、二つの窓を切りあけて再び私に手渡してくれた。またしても目の潤んでくるのに堪えながら「ありがとうね、おうちへ持って帰るわ、いい？」ときく。「うん、いいよ。」とにっこりした顔に、又

夕胸を熱くしたのだった。

二十四節季の二月の雨水ともなると、春の近づく足音がきこえそうな日もある。いよいよ大人達は学年末、新年度などと気忙しく、それに厚い靴下がぬげずにいるのに、砂場に入水を入れてはだしになったりする。春へ向かってのエネルギーは始動しているのだ。草の芽、ふきのとうは頭を出し、樗の幹の肌がつやを帯びてくる。「自然に一致することもの栄誉」とのスタンレー・ホールのことばではないが、生命の躍動を感じとって外へ、外へと心もからだも向いている子ども達に、大人の恩きせがましい、お為ごかしの言葉やふるまいを決してすまい、と思う。



ほんとうのことなら

多くの言葉はいらない

野の草が風にゆられるように

小さなしぐさにも

輝きがある

ひとつの花のために

いくつの葉が

冬を越したのだから

冬の風に磨かれた

椿の葉が輝いている

母のように輝いている

星野富弘

春に向かってはばたこうとしている子ども達を、ただ見守っただけでよいのだろうか！  
なかで力弱い子どもに何をしてあげればよいのか、迷ったり、悩んだり、喜んだり、  
でも、秘やかな楽しみもある子どもとの二月である。

(音羽幼稚園)